

—本のまわりに集まろう—

創刊号

2014年6月号《創刊号》

published by ELPC

Online Magazine

月刊ほん

6
June

鼎談

電子書籍は
本の形を変える、
読書を変える。

クラウド・コンピューティング時代に入った今、
著者、出版社、書店、図書館は
電子書籍とどう向き合うか。

リアス・アーク美術館常設展示図録 東日本大震災の記録と津波の災害史

column 図書館司書のつぶやき
司書ができればならないこと・
知らなければならないこととは？

え！こんなにあるの!? 知らなかった…

ほんの泉
気になる新聞・出版社のPR冊子を紹介



YAMAZAKI HIROKI

●電子書籍図書館推進協議会代表

山崎博樹



KADOKAWA TSUGUHIKO

●株式会社KADOKAWA取締役会長

角川歴彦



YUMEMAKURA BAKU

●作家

夢枕獯

鼎談

002 電子書籍は本の形を変える、読書を変える。
角川歴彦×夢枕獯×山崎博樹

第一部 電子書籍はどこまで進んでいるか

004 ●図書館は新刊書のショーウィンドウ

007 ●電子書籍の可能性に期待

010 ●電子書籍ならではの仕掛け

013 ●紙の本の行く末はどうなる

014 ●電子書籍普及にきつと来る25%の壁

第二部 電子書籍時代の出版と読書

017 ●書店は守らなければいけない

020 ●『角川日本地名大辞典』を生み出す力

021 ●Googleの創業精神、それは図書館だった

023 ●三方一両得の関係構築を目指して

026 コラム：図書館司書のつぶやき
司書ができればならないこと・
知らなければならないことは？

032 リアス・アーク美術館常設展示図録
東日本大震災の記録と津波の災害史
震災を語り継ぎ、大切な人が暮らす未来の為に…。

036 ほんの泉《新聞・出版社のPR冊子》
角川書店 ダイアモンド社 丸善出版 ジュンク堂
東京大学出版会 東京外国語大学出版会 有隣堂
吉川弘文館 幻冬舎 大修館書店

039 編集後記

電子書籍は 本の形を変える、 読書を変える。

クラウド・コンピューティング時代に入った今、

著者、出版社、書店、図書館は

電子書籍とどう向き合うか。

KADOKAWAの角川歴彦会長と

作家夢枕獯氏、そして

電子書籍図書館推進協議会の

山崎博樹代表とが語り合った。

2014年4月8日 KADOKAWA本社にて

●電子書籍図書館推進協議会代表
山崎博樹

●株式会社KADOKAWA取締役会長
角川歴彦

●作家
夢枕獯



第一部 電子書籍はどこまで進んでいるか

図書館は新刊書のショーウィンドウ

山崎▼初めに少し説明をさせていただきます。電子書籍図書館推進協議会は、全国の図書館と、東京を中心とした出版社や個人の方に会員になっていただいて、少しでも電子書籍を広げていきたいという趣旨で発足しました。

地元の出版社と地域の図書館には親密な関係ができてることが多いのですが、大手の出版社さんと図書館が話し合う場はなかなかありません。情報共有に欠けている面を補いたい、出版社と図書館員がフランクに話し合う場をつくりたいという希望です。

電子書籍を扱う公立図書館はまだ全

国に30館弱しかなく、普及率がとても低い状態です。「公共図書館は貸本屋、大学図書館はコピー屋」と揶揄されることもある図書館ですが、インターネットの普及でこの先、更に利用者の図書館の利用の仕方も変わると思います。

夢枕さんにとって図書館はどんなところでしょうか。原稿をお書きになるときに図書館へ行って調べものをなさったりされますか。

夢枕▼昔はありましたが、今はほとんどありません。だいぶ前から、必要な本は買って手元に置くことにしています。

す。10代のころはもうほんとうに図書館をよく利用して本を読んでいたが、最近は少ないです。

ただ、直接読者の方から話を聞いたリ手紙をいただいたり、あるいはインターネットで自分の本をみんながどういうふうに進んでいるのかなと調べると、「図書館で読みました」というケースが非常に多い。この何年かはとくに多い印象があります。

山崎▼公共図書館に本が入ると人々が書店で購入しなくなるので、出版社にも著者にも不利益という見方があります。

夢枕▼できれば新刊は1年ぐらいいは図書館に置くのは待っていただけたら有

角川歴彦

株式会社KADOKAWA取締役会長。

現在の役職は、内閣官房知的財産戦略本部本部員、一般社団法人デジタルメディア協会(AMD)副理事長、東京大学大学院情報学環特任教授、MITメディアラボ特別研究員、神戸芸術工科大学客員教授、財団法人角川文化振興財団理事長、株式会社角川アスキー総合研究所代表取締役社長など。著書に『クラウド時代とクール革命>』(角川oneテーマ21)、『ゲージル、アップルに負けない著作権法』(角川EPUB選書)。

KADOKAWA TSUGUHIKO

夢枕 獏

作家。

『サイコダイバー』『キマイラ』『餓狼伝』『陰陽師』『闇狩り師』『大帝の剣』『大江戸忍龍伝』等作品多数。『上弦の月を喰べる獅子』で日本SF大賞受賞。『神々の山嶺』で柴田錬三郎賞受賞。『大江戸釣客伝』で泉鏡花文学賞、舟橋聖一文学賞、吉川英治文学賞を受賞。漫画化された『陰陽師』で手塚治虫文化賞、『神々の山嶺』で文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞を受賞。

YUMEMAKURA BAKU

山崎博樹

電子書籍図書館推進協議会代表。秋田県立図書館副館長。

秋田大学教育文化学部非常勤講師、日本図書館協会代議員・認定司書、ビジネス支援図書館推進協議会副理事長、総務省地域情報化アドバイザー。著書として『図書館と電子書籍—ハイブリッド図書館へ』(教育出版センター)。

YAMAZAKI HIROKI

難しいという感じでしょうか。(笑)

普通に新刊書として本屋に置いてある本を、図書館に置く意味も疑問です。

山崎▶図書館に対してはそういう意見が常にあります。でも一般的に図書館では、新刊はほとんど1冊しか買いません。1冊の本の貸し出しはだいたい1カ月に一遍ですから年に12人しか読まない。ですから、むしろショーウィンドウ効果のほうが高いというのが図書館の考え方なのですが。

夢枕▶いつとき、何冊も同じ本を図書館が買い込んでいませんか？

山崎▶はい。昔はそういう考え方があったのですが、今は図書館のほうも、何でも貸せばいいという考えではなくなりました。私の勤務する秋田県立図書館の場合、同じ本は2冊まで、それ以上は買わないのが原則です。

もちろん地元での出版物であれば5冊買うということもあります。県立図書館ですから、あまり書店では売れない

ようなものを買って支えして、ロングテールの資料として保持し、提供していくこともあります。ついでに言えば秋田県立図書館には蔵書が86万冊ほどありますが、新刊本で購入されるものは年間1万冊もありません。そのほとんどが、たぶん売れない本です。(笑)

アメリカやヨーロッパでは、出版の冊数に対する図書館の購入割合がとても高く、何%という比率で買っています。ベストセラー以外のものは図書館が支えているという面もあるのです。

話が戻りますが、夢枕さんのような方にはわざわざ図書館に行くのは面倒くさいですね。

夢枕▶そうですね。国立国会図書館は何度も利用していますが、それは国会図書館でなければならないものだから。僕のほうで書名がもう分かっているのでも、「ちょっとコピーを頼みます」といって担当編集者の方に行っていたんだけど。

電子書籍の可能性に期待

角川▶KADOKAWAグループには角川アスキー総合研究所というものがありまして、そこで1万人調査^①というのをやりました。その1万人調査の中で、図書館というより書店の問題として、年間に書店に1回も行かなかった人、そこにはもちろん2年に1回行った人というのでも入りますが、それを調査しました。その結果を聞くと正直がっかりしちゃったのですけれども、年に1回も書店に行かないという人が50%いるんです。ほんとうにきれいに5割。

この調査では同時に、年に映画館に1回も行かないという人、映画館に足を運ばないという人も調べていて、これが55%です。そしてこのアスキー総合の1万人調査をやったところ、奇しくもイオンさんのイオンシネマが映画館に関するお客様調査を行われたのです

が、その結果と、この数字が数%しか違わないのです。イオンシネマさんは57%というようなことが出ていました。

おそらく1万人というレベルで調査をすれば、映画館には55%の人が年に1回も行かない。書店には50%の人が

山崎▶そのコストはばかにならない。よく図書館はタダといいますが、来館される方にかかっているコストは結構高い。図書館に行く時間をお金に換算すればかなりです。ですから、私たちも、来館されなくても使えるサービスをつくっていかねばいけないと思います。電子書籍というのもその一つです。

ただ、今世の中で売られているような電子書籍を図書館が扱うのは問題があると思っています。「民」と同じものが「官」に並んでいては「民」はビジネスになりません。公立図書館の役割は「コントロールされた資料」を電子版で提供することで、それは紙の本を閲覧室に置く以上に気を遣わなければいけないことだと思います。

一方で電子ならではの新しい書籍も出てくるでしょう。その辺は実際に電子書籍をつくっていらっしゃる角川会長からお聞かせいただけますか。

行かない。もう、時代はこういうことなのだと思います。

では、行かなかった人にどうやって本を読んでもらうか。もし、書店に行かなかった人というこの円グラフの黒い半周の部分を埋める役割を、図書館がしてくれるのならば、図書館で本を読むということも、僕は非常にポジティブに受け止めたくなります。



① ネットやコンテンツ、消費行動に関する1万人調査『メディア&コンテンツ・サーベイ2013』

どこで本に接するか。僕たち出版人や作家のみなさんは百人が百人、紀伊國屋や三省堂に足を運ぶと思っているんです。ところがこれだけ日本中に書店があふれていて、「アメリカと違って日本は書店が多い。アメリカは書店がないじゃないか」という話をしたところで、50%の人が本屋さんに足を運ばないのであればどうですか。その本屋さんに足を運ばない人が図書館を利用する。あるいは、僕たちが図書館以上に今問題視しているのは中古書店です。1冊100円とかで売買されると、まあ、悲しくなるわけです。初めから、本に接して、本のよさ、つまり好きなのところにチェックをするというようなことをまるでしないで、きれいに読んで新刊を新古書店にすぐ持っていく人がいるという。

そういうことも認めなければいけないとすれば、その円グラフの黒い半周のところを図書館が何割かカバーし

て、新古書店も少しカバーするということも、それがあんなら僕らは認めなければいけないんじゃないかと思う。もつといえはマンガ喫茶だって認めなければいけないのかな、とそんなことも思うのです。

ですが、僕はここに来て、もしかしたら電子書籍がその半周の部分を埋めてくれるのではないかという期待を

持っている。だから電子書籍をつくるだけでなく、電子書籍ストア「BOOK☆WALKER」を始めました。今年で4年目になります。

講談社さんと紀伊國屋さんに声を掛けてデジタル電子図書館というものをつくろうと思ったのも、やはり電子書籍というものに、パラダイムシフトが起こってほしいと、そういうことまで

期待しているからです。今はそういう心境にいます。

山崎▶活字離れとか本離れとかいわれますが、毎日新聞「読書世論調査2002・2011」を見ると、1971年と2010年の読書率は、雑誌は少し下がっていますが、書籍はほとんど変化がありません。年代別に見ても40代が少し高く、60代は少し低いが大きな差はありません。若い人のほうがライトノベルなどで本に触れる機会が多いという調査もあり、実は本離れは進んでいないともいえるのです。

秋田県立図書館では2013年に、小松左京先生の『日本沈没』の直筆原稿や創作メモ、阪神淡路大震災のレポート『大震災'95』の直筆原稿を、デジタル資料として公開しました。これは出版に携わった方の自宅の倉庫にあったものなんです。一部欠けていましたが、ほぼ全部を今回デジタル化しました。

角川▶光文社の社員だった編集者の手元にあったんですね。ラッキーでした。

山崎▶今までは、図書館は出版自体にはかかわらないで、基本的に出版したものを買うだけだったわけですけども、秋田県立図書館にある2100の電子書籍のうち1400が、著作権の切れた資料を自分のところでお金を出して電子書籍化したものです。

このように、貴重な資料や絶版になった本、あるいはコストが見合わなくて出版できなかった著作、しかし価値あるものは、国民の財産ですから、図書館がうまくそれをキープしておいて提供する。図書館は本来そういう機能を持っていたはずなんです。これも電子書籍ならではの可能性です。

出版社さんの電子書籍の役割と図書館が担う電子書籍の役割は、若干クロスする部分はあったとしても、まったくは重ならない。そうでなければ今ま

での図書館の役割とは合わなくなりそうです。クロスの部分をできるだけ減らして、それぞれの役割を担うことが大事だと思います。

私も図書館はやはり出版物が上がつてこなければ販売にならないのです。何かの情報を図書館から出すことができて、それが出版物になってまた戻ってくるというケースになれば、それが一番いいと思います。

夢枕▶秋田県とKADOKAWAが何か提携されたそうですね。

山崎▶はい、この3月に「連携協定」が結ばれました。『台北ウォーカー』で秋田県の情報を発信したり、秋田で映画や出版のイベントを開催する計画があるようです。

秋田県は都道府県レベルでは唯一の読書振興条例がある県なので、その面から図書館も協力していきたいと思っています。



電子書籍ならではの仕掛け

夢枕▶若い人も字は読んでるんですよ。スマートフォンとかあいうもので。字は読むけれども、それが何かという、昔とは大きく違う。

山崎▶対象が違ってきていること、もう一つ、長い文章を読めなくなっていることも、間違いないと思います。

夢枕▶2行とか3行とか。

山崎▶ええ。LINEですと当然2〜3行ですし、メールのやりとりを見ていても短い。長い文章になると途中で諦めてしまう。私の20代の知り合いも、分厚い本を最後まで読んだことは今まで一度もないといいます。

私は県内の学校図書館をほとんど回ったのですが、本棚にクモの巣が張っている。ああなるともつ子どもは行かないです。やはり本に触れる機会をつくっていかねばいけません。本を読む訓練を小さいころから積み重

ねていくことが大事です。

今も、小学校の低学年まではかなり手厚い。家ではお母さんが、図書館や学校ではボランティアの方が読み聞かせを行っています。ところが、小学校



↓ 第59回読書調査（全国学校図書館協議会・毎日新聞社）

の高学年からは野放しになってしまふ。読書調査^①でも、小学生が10・1冊、中学生4・1冊、高校生は1・7冊という数字になり、読書量が6分の1になってしまふ。これではおとなになつて読書に帰ってくる人口は少ない。

夢枕▶その数字は何年か連続して調査

したものです。小さいころは読んでいたけれども大きくなると読まなくなっているというデータなんです。

山崎▶そうです。

角川▶長い文章を読めなくなったら野坂昭如さんなんて大変ですね。あの人の文章は、1ページに丸が1つしかない。（笑）

夢枕▶改行もなく長文が続くと僕らでも大変です。小学校の時はいろんな文学が、ダイジェスト版で載っていましたけれども、なかには苦手なものがありましたよ。

山崎▶今の若い人は短い文章に絵文字を入れますね。感情表現を文字ではなく絵でしたい。文章で伝えるのは難しいからイメージで出す。情報を共有するのに、今はいろいろな方法がある。世の中にあるものを否定するわけにはいけないので、それを踏まえて読書というものを深めていく必要がありますね。

角川▶僕はざつき、電子書籍が本を読む仕方の一つのパラダイムシフトになるんじゃないかとお話ししましたが、

電子書籍だと量が読めるんです。明らかに、です。

リアル紙の本をめくると電子書籍で1ページめくるのでは、電子書籍のほうが早い。ですから紙の本の8割の消費時間で1冊読めるようになったといえます。ソニーの「Reader」という端末がありますけれども、あれでアメリカの人たちがどのくらい本を読んでいたかということ、ソニーの人に聞きましたら、1人3000冊読んでいたというデータがあるそうです。

夢枕▶期間はどのくらいで3000冊ですか。

角川▶Readerがアメリカでサービスを開始してから約7年くらいが経っていますが、それで3000冊です。

夢枕▶それはすごい数字ですね。

角川▶ええ。ところが、BOOK☆WALKER

が3周年になって出版社を招待してお祝した時にお話して、これは非公開放だったんですけど、今日はこういう機会なのでお話ししますと、BOOK☆WALKERの中で3000冊読んでる人は1000人います。

夢枕▶それは購入したということですか。

角川▶そうです。3000冊購入したということなんです。

夢枕▶読んだかどうかは……。

角川▶わからない。けれども、お金を払うわけですからね。

夢枕▶少しほっとしました。（笑）

角川▶更にそれだけではなく、1000冊買った人が3000人います。

山崎▶それは漫画もカウントしている数字ですね。

角川▶そうです。漫画もカウントしています。『進撃の巨人』といっても実際には10数巻あるので10冊以上になるわけですからね。



夢枕 図書館の本は、ある程度人が手に取って読んでいると、やはり傷んできますね。普通のハードカバーで、どのくらいが限度なんですか？

山崎 限度はないんですけども、一般的には6年から10年で開架から書庫に移すとされています。図書館はハードカバーを主体に購入しますが、日本の本は非常に丈夫です。無縁綴じでもアメリカのペーパーバックなどに比べればはるかに丈夫です。

紙の本の行く末はどうなる

むしろ保管で問題なのはカビ、埃、酸化などで、特に雑誌は古くなるとなかなか手に取られにくくなります。

あと、文字が古いとアウトです。旧活字や、旧漢字の昔の全集は誰も読まない。

夢枕 僕も昔の字はちよつと読みづらいですね。今の活字じゃない、ちよつと、アリの足が1本多いような見た目の。

山崎 ええ、それが旧活字です。旧漢字は全集などには多い。文字のサイズも昔の本は小さいですね。今は大活字本と呼ばれている、文字の大きな本があり、図書館では高齢者に人気です。ただ、あれは1冊の本が5冊ぐらいになつてしましますので、持ち帰るのは大変です。そういう面でも、電子書籍は高齢者の利用が多いのです。図書館に来られない人が読むチャンスになつ



ています。

夢枕 いずれは、紙の本は少数になつて、基本的には全部デジタル本になつていくだろうなという気はしています。僕が思うのは、その時に紙の本がどういう残り方をするのかということです。おそらく相当少ない数字でしか残らないと思うんですけども。

この前ある出版社がやったことなのですが、デジタル本で絵本を全部読めるようにした。そうしたら紙の本の売上が上がったというのです。それはどういうことかという、まずお母さん

そういう数え方で、リアルの本を3000冊買ってくださいといったら、「何をいうのか」といわれますよね。家のここに本が3000冊並びますか、と。

夢枕 ふううの家には置けない量です。

角川 3000冊はともかく、電子書籍だと1000冊読むキャンペーンなんていうものができてしまつんです。

夢枕 最近はネット上に、何冊読んだかというのがグラフで出るようなものがありますね。彼らは競争して読んでいるのでしょうか。

角川 そうです。それはなぜかといえ、電子だからです。

『スレイヤーズ』というライトノベルの古典的名著があるんですけども、これが今、何巻かな。たしか20冊、24冊ですか。これを1日1冊読むというラリーをやったんです。挑戦者300人ぐらいからスタートして、それで

10人ぐらいが完走した。

夢枕 それはイベントとして？ それとも自然発生的に？

角川 イベントとして仕掛けたんです、お遊びですけれど。

最後に著者の神坂一さんの「このラリーに参加してくれてありがとう」というメッセージが出る。

こういう何かおもしろいことができるとも電子書籍です。

山崎 電子書籍は物理的な軽さも大きな魅力です。秋田県立図書館では「歴史読本」を10年分、電子書籍化しているのですが、おかげで私も読みました。もともと所蔵されていたのですが、手に取ろうとは思いませんでした。それが電子書籍なら自宅で読める。もし120冊を自宅に置いたら妻に怒られますね。(笑)

それに、雑誌は拾い読みしたい。この連載を通して読みたいというニーズにも相当なメリットがありました。





る。ところがデジタルで所有してしま
うと、わざわざ探さないと出て来ない。
デジタル化が進むのはたぶん早いか遅
いかという時間の問題だけど、最後に、
紙の本のその存在は残るだろうと。
角川▶僕はそこまで行かないと思っ
ています。今、2013年の数字が出て
きているんだけど、電子書籍の比
率は8%弱です。20%から25%までは
わりとスムーズに行くと思います。ア

メリカの出版社が20%を超えたといっ
ていますから。でも、そこら辺が一つ
の壁で、その壁を破るには、電子書籍
なりの努力が必要でしょう。そういう
それぞれの時代の中で電子書籍も変
わってゆき、紙の本の5割を超える状
況が生まれるのです。まあ、川上君な
んていうのはデジタル人間の典型です
から、彼の意見は非常に尊重すべきだ
けれども、そこに行くまでのプロセス
が「あ、これはもうデジタル」と、ジャ
ンプしちゃう。だからそういう意見も
出てくるけれども、非常にアナログ的
な8%の壁、20%の壁、50%の壁みた
いなものがあるって、電子書籍は電子書
籍なりに苦労しなきゃいけないんじゃないか
と思います。
夢枕▶川上さんによると、われわれの
ような紙で育った人間がだんだん減っ
てくるだろう、と。もう最初からデジ
タルで育ってきた人間たちがほとんど
多数を占めていくにしたがって、結局

そういう傾向になっていく、と。その
年齢計算みたいです。
角川▶それはあります。でも、社会的
評価というものもありまして、やはり
紙になったものに対する評価がある。
紙になったことが一つの評価になるの
です。紙になったからこそ、朝日新聞、
読売新聞、日経新聞といった中央紙の
書評欄に載つかる。ポーンデジタルの
電子書籍が書評に載った例を、僕は寡
聞にしてまだ一回も見えていないです
ね。また、社会も活字になったものの
評価はストレートにしてくれる。ポー
ンデジタルの評価は非常に危うい。
獏さんがおっしゃったような、紙の
本はなくなる、少なくなってしまうま
では、中央紙の書評欄がポーンデジ
タルをどんどん取り上げていく時代を
経なければ、そこには行かない。それ
が僕が申し上げた8%、20%、50%の
壁です。
山崎▶図書館は、今は20数館しか電子

がデジタル本で本を全部読んで、その
上で、「あ、これが面白いから、うち
の子どもに読ませよう」と紙の本を買
う現象が起こったのです。おかげでそ
の出版社の絵本は急に売上が伸びたと
いうことらしいんです。
そういう形も含めて、どこか、社会
のある一角に紙の本はやはり残るだろ
うとは思ってすけれども。
山崎▶年間7万点以上の書籍が出版さ
れる今、どれを読んだらいいのかわか
らない。ネットでブラウジングするの
でもいいのですが、図書館が、本をセ
レクトする役割もあると思っています。
す。
夢枕▶僕は、紙の本はデジタル本のた
めに必要なものかなという気がちょっ
としています。というのは、デジタル
書籍で新刊を出した時には、誰が僕の
本が出たことを知ってくれるのか、ど
こでどういうふうにアナウンスするか
は大きな問題だと思うのです。みんな

が最初に立ち上げる画面のトップペー
ジに宣伝すればいいんですけれども、
ページの情報量は限られている。載せ
る新刊のチョイスから漏れた場合は、
新しいデジタル本が出たことを読者は
全然知らずに過ぎてしまう。その時
に紙の本があると、「ああ、こういう
デジタルの本も出たのか」というのが
やはりあると思う。
山崎▶書店に行くと、予定していな
かった本を買ってしまうという人は多
いですよね。それはやはり手に取るこ
とができる、紙の代えがたい長所です。
ネットのブラウジングは、そこが弱い
かなと思います。

電子書籍普及にきつと来る25%の壁

みたいなものだろうという言い方をし
ています。たとえば本を机の上に置い
ておく。そこに在る。「ああ、あるな
まだ読んでないな」という存在感があ





電子書籍は本の形を変える、読書を変える。

第二部 電子書籍時代の出版と読書

書店は守らなければいけない

山崎▼その書店ですが、世の中に電子書籍の話題はいろいろ出ていますが、書店の役割に関してはあまり議論されていないような気がします。2013年の東京国際ブックフェアでの、角川会長の「書店店頭こそがヒト・モノ・カネ・情報が集まる出版界のプラットフォーム」という発言が、非常に印象に残っています。「書店生き残りの道」についてはいかがでしょう。

角川▼これまでの話で、紙のほうがいいのか電子書籍がいいのか、その長所と短所が明らかになってきましたけれども、'iTunes Store'あるいはAmazon

のような電子ストアと、実際の本屋さんの店頭とではどういう差があるだろうということも、同じぐらいの比重で議論されていいと思います。

Apple iTunes Storeを例にとると、バーチャル空間に巨大な書店ができて、そこで音楽だけでも10何万曲とか100万曲とか揃えられる。本も同じように揃えられる。そういう技術革新が起ったのは確かだと思います。それが、いってみればAppleという1つの会社、巨大ではあるけれども1つの企業で構築できるのです。

それに比べると、紀伊國屋さんの新

宿の本店は一等地にあれだけの坪数を使い、大阪店とか梅田店も800坪も1000坪も借りている。大変なコストです。リアルな書店は、そんなコストを抱えながら、そこに出版社がつくった本を並べ、ヒト・モノ・カネ・情報を集めて売っている。もう健気なんです。僕はiTunes Storeとリアルなプラットフォームの紀伊國屋梅田店を想定した時に、やはりみんなでリアルな書店を守ってあげなければいけないんじゃないかという意識をまず持っています。

これは別に紀伊國屋だけではなくて、全国に今、コンビニとか雑誌しかないところは除いて、書籍もきちんと

書籍をサービスしていません。全国に公立図書館は3228館ありますから、まだ1%にも満たないんです。これだけ紙の本を持っているとなかなか違った素材に対して飛び込めません。

夢枕▼僕は自分の持っている本を全部、広い部屋に並べて背表紙だけ全部見えるようにするのが夢なんですけれども、ちょっと難しい。相当広くないと。一度測ってみたら相当ありました。

山崎▼90センチ幅に40冊弱入るのが目安です。

角川▼一年半ぐらい前に新宿の地下アーケードにKADOKAWAの電子書籍で出している本の背表紙を並べた広告を出しました。リアルサイズの写真ですから相当の大きさでした。

面白いですよ、BOOK☆WALKERに「リアルの本を並べたらこれだけのものがあるんですよ」というアピール。(笑)

山崎▼本の質量と比べるとタブレット



端末の薄さが一層際立ちますね。しかもタブレットではすべての本の表紙を見せる。図書館の実験ですと、背表紙だけ見せるより、表紙全体を見せると3倍ぐらい利用が増えるといわれています。

ます。

夢枕▼それは本屋でも同じ。売れると思うものは平積みにして、次は棚に置かれ、最後は背表紙しか見えないようになったらどう。

置いてある店は7500店ぐらいあるとすれば、僕はやはり出版社や取次店が総力を挙げてそれを守ってあげるという意識を持たないといけないんじゃないかと。これは一回失ったら、もう取り戻せない。

夢枕▶ほんとにそうですね。今、書店は、大型書店か、あるいはすごく個性の強い、置いている本の冊数は少ないけれどもある特化した本がいつでもあるみたいな書店に分かれているという印象があります。

僕はこの間、メリーゴーランドという四日市にある本屋さんに行きました。そのお店は地域密着型で、いろいろな活動をしています。作家のサイン会もやるので、僕が行ったのも何度目かなのですが、だいたいお客さんの顔ぶれはある程度同じと思うのですが、それでも、本屋としてある程度の実績は挙げている。

東京にもちらほら、絵本の専門店み

れる前、大学を卒業して2〜3年ぐらいのことです。本屋さんには毎年春には教科書を買います。いろいろなところの教科書をセッとして、生徒の人数分を揃え、学校へ。これがすごい売上になる。小田原中の小学校、中学校の生徒が一人10冊ずつぐらい買っていくわけなので、店主は「これがなかったら、うちはやっていけないんだよ」というていました。今はどうなのかな。

山崎▶いずれ電子書籍型の教科書もできるでしょう。国でも検討を始めています。それはそのメリットがあります。書いてあるものだけではなく、外部のアーカイブと連動できる。たとえば秋田図書館には『解体新書』の電子アーカイブがあります。教科書でクリックすると、子どものほうにアクセスしてきて実物に近いものが見られる、というようなことが期待できます。しかし、まだ簡単には進まないと思います。教科書以外にも、指定図書に

たいなものがあって、みんな上手に、作家を呼んだり、その作家の絵の展覧会をやったりしながらやっている。「これだけ小さいところで回してるの?」と思いつながら行くと、普通の書店では絶対見られないような絵本がたくさん置いてあったりして、これが面白い。そういうふうに両極化しちゃうのかなという気がします。

山崎▶秋田市にジュンク堂が当時35万

なると売上に影響します。図書館は必ず買いますから、それだけです3000冊以上必ず売れるし、一般の方も指定図書ということで買われる。

角川▶理論上はそうでも、実際には3000冊という計算にはならないですよ。

昨日、岩波書店の岡本厚社長とちょっとビジネスミーティングをして、学術図書の存亡の危機という話が出ました。以前は1000部売っていた学術図書が300部になっちゃったという。具体的な話としては、最近力を入れた『岩波講座日本歴史』(全22巻)が、初めはあまりにも反響が悪いものだから心配したけれども、その後店頭に並んだことでまた売れて、今は8000部まで来たということでした。それでも、前は『日本歴史』と言えど3万部は売れたのに、それが8000部になってしまったという話でした。

冊を超えるスペースで進出して来たので、もともとあった地元の駅前書店が続けられなくなって、今は居酒屋になっています。

図書館は書店さんとも深い関係がありますから、書店さんが成り立つように私たちも考えていかなければいけませんね。

夢枕▶僕は昔、小田原の書店で働いていた時期がありました。まだ原稿が売

だから図書館の数だけ売れるはずだというのは、それはもう妄想なんです。300部というのは僕もよくわかる。僕自身が今から30年前に角川の学芸出版物の編集者をした時には、毎年のように文部省に行つて、文部省助成金出版をもらってくるのですが、それがだいたい300部です。それでほとんどに合わせて、再版すると利益になるというものです。父^①の商法では、「これは500部つくつて300部が初年度に売れて、残り200部を3年間で売って、それで担当者の給料が出ればいいね」といつていたものです。そういうことが学術書というものを残したのです。

今のKADOKAWAの社長は500部つくつて300部が初年度で売れて200部残つたら、けしからんといふので、だから僕も進められずにいるんです。(笑)

① 歴彦会長の父、角川源義氏

『角川日本地名大辞典』を生み出す力

夢枕▶前に会長からいただいた辞書。

ああいうものは実際ペイできたかどうかは、僕は全然聞いていないですけど、でも、あれはその、何というか、売れないけれども出すんですか。それとも、売れると思って出している本なんですか。

角川▶そこが出版社の浅はかなところで、売れないと思って出している出版物はないんです。(笑)

夢枕▶僕も売れないと思って書いた小説はないです。

角川▶編集者も、部数を決定する営業部も、売れてほしいんですよ。期待値が込められているものです、本当に。ですから、皆さんが定価を見た時には、ほんとうの価格の8割ぐらいの安い値段が付いていると思ってほしいですね。出版社の2割ぐらいのスケベ根性が値段を安くしているんです。でも、

それがなくなったら、もう出版社をやっている意義がないと思うんですよ。(笑)

夢枕▶ええ、売れない本をいかに出版するかという義務感って、出版社にはありますよね。だから、売れている本はもちろんどんどん売って、その余剰金で、売れないけれどもこれは出版として力まさないといけないぞ、と。たとえばNHKだと「邦楽百選」みたいな、視聴率は取れないと分かっているけども制作するような、腹のくくり方が、やはり大きな出版社にはないといけないですね。

角川▶ええ、ええ、そうです。必要でしょう。『角川日本地名大辞典』というものがありません。

先代は、自分が生きている間に「地名大辞典」を出したいと夢のように語っていました。それは、できないと

いうことを覚悟して語っていたのです。その時に父は、地名の中には民俗学の結集だとか歴史の結集がある。柳田国男先生がされた地名の研究が全部1冊の文庫に入っているようなものが「地名大辞典」である。そこにすべてが調べられているのだと、そんなことを語っていました。

それがあったので、父が亡くなった時に、角川で出せる時に出そうという編纂が始まったのです。

不思議なもので、遺言で出版しようと思った者たちがみんな一生懸命考えると、こんな採算の合わない仕事でもできるのです。

秋田県の『地名大辞典』では、妻が秋田の出身ですから「私も付いていく」って一緒に行きました。それで加賀谷書店さんの朝礼に出て、「私も鷹巣出身です」とかいつて、鷹巣と秋田市ではかなり離れているんだけど、そういう健気なところがいいと、書店

の外商の人が売ってくれるんです。そういう売り方まで発明して、それでようやく47都道府県全部の『地名大辞典』を出し終わった。

で、ホッとしたら、今度は現行行政地名がどんどん変わっちゃう。

夢枕▶どこでしたっけ。泉佐野市？市の名前を売ろうとしましたよね。

角川▶そういう不埒なことをする。(笑)

夢枕▶地名をいじっちゃダメです。新しく球場をつくって、その球場の呼び方に、企業名を付けたり。

角川▶それはまだ可愛げがあるけど、やっぱり地名には、そこに県の歴史、町の歴史、それから地元の歴史がありますからね。

山崎▶「地名辞典」は多くの図書館にあります。ですからこれは間違いなく3000部以上売れています。(笑)

角川▶僕はそれが図書館だと思う。以前、図書館協会に依頼されて講演した

時に、それこそが図書館なんですよといつて、まあ温かい気持ちで叱咤激励したことがあります。

その時に、大野晋先生の『古典基礎語辞典』のことを、こんなばかりかみtain本をうちは出したんですよと、講演の素材にしました。そしたら、聞いて

Googleの創業精神、それは図書館だった

夢枕▶僕は架空の本^①を出したことがあります。架空の本の書評を1冊にした本なんですけど、幾つかは本物も混ぜてあるというものです。その中に、佐藤春夫のこれまで見つからなかった詩集が見つかった、それは『枯淡桜』だとタイトルまで付けて、中の詩も僕がでっち上げて幾つか書いて、それを書評した部分がある。するとどこかの図書館から「それはうちにはないんですけど、どこで手に入れたらいいんですか」という問い合わせがあつて……、

いた人たちがみんな動いてくれたようで、すぐに重版になったことがありません。

まさか日本図書館協会の講演会で本の宣伝をすると思った人はいなかったでしょう。僕もしたつもりはなかったんですけれども。(笑)

光栄でしたね。図書館からそういうのが来たのは。

山崎▶図書館員はやはり、隅っこにあるものを集めたいんです。メジャーなものは書店が扱ってくれますから、どちらかというと絶対に書店になさそうなものが欲しい。そこらあたりの棲み分けを考えます。

図書館は利用はタダでもコストは掛かっています。税金も使っているし、利用者も交通費と時間をかけてやってくる。それに見合う、図書館でしか手

に入らない資料の提供が必要です。図書館が持っている刊行されていないものと、刊行されたものがハイブリッドに活用されて、また次の刊行物になってくれば図書館の役割が出てくると思います。その連環の中で組み合わされて、止まってしまわないようにしたいですね。

昔、KBSという韓国のテレビ局が秋田県立図書館に来て、「石井漠の秋田公演のチケットがあるだろう、それを撮りたい」と申し込みをされた。石井漠は、大正・昭和を通して現代舞踊の先覚者として活躍した舞踊家ですが、秋田県出身で、その弟子に韓国人の方がいたのです。確かに探してみるとチケットが出て来ました。

おかげでそのチケットについて説明した私は、韓国のテレビに出演しました。(笑)

夢枕▶僕が必要なものの範囲ですけれど、図書館じゃないと手に入らない本

を利用してほしいんだと。

検索を事業にすること自体が、やはり図書館の発想なんです。

今やGoogleはだいぶその姿勢が変わってきてしまったように思えるんだけれども、彼らの創業の精神は図書館から出た発想なんですね。

夢枕▶昔、エジプトのアレキサンドリアで世界中の本をコレクションしちゃおうみたいなことありましたね。

三方一両得の関係構築を目指して

山崎▶アメリカにはフェアユースの考え方があり、著作権が多少緩い。日本はかなり厳密な著作権の処理の仕方です。基本的に、亡くなったことを確認した上で50年です。

著作権者がわからなくなってしまうものを、図書館は大量に抱えています。それを簡単にデジタル化することはできません。著作権がわからない、

というものが少なくなってきたいます。書名がわからないと、あるかどうか分からないし。

僕は、こういうことが書いてある本が10冊ぐらいあれば、棚から10冊持ってきて、家で調べたい。1冊ずつ借りて来るのは、ちょっとしんどい。

山崎▶そこですね。秋田に無明舎という出版社がありまして、社長さんが安倍^{あべ}さんという方なんです。ある時秋田県立図書館の書庫をお見せしたことがあります。そうしたら安倍さんがおっしゃるには、ここには出版に関するアイデアが満載である、と。開館13年の図書館ですから、明治時代の資料もたくさんあるのです。たぶん、創作活動をされている方には役立つものがあると思います。

今まで、書店さんや出版社さん、あるいは著者の方と、図書館が話し合うことはほとんどありませんでしたが、図書館には実はコンテンツのもとにな

角川▶そうです。だからGoogleの彼らは、一時「新アレキサンドリア人」といわれたんですよ。

夢枕▶それは電子だからできることですね。実際に世界中の本をどこかに置くというのは、もうあり得ないです。

角川▶そういうことなんです。そこで出てきたテーマが、IT技術によって知の再編成をするという論理だったのです。

構わないから、やってしまおうというては、やはり問題になる。

国立国会図書館では「近代デジタルライブラリー」というサービスを行っています。明治以降の図書・雑誌のデジタル化資料の公開です。このために著作者の没年調査に大変なコストを掛けています。デジタル化のコストよりも著作権の処理のコストのほうが高い

るものがたくさんあるので、そういうものを発信することで、図書館の役割が生まれると思います。

夢枕▶その資料に没頭できる部屋1こもらえるといい、何かそういうカードはないですか。治外法権カード。図書館内の好きなところへ行つて好きな本を持ってくる……。 (笑)

角川▶Googleは地上のすべての本を検索する」といった時、ラリー・ペイジとセルゲイ・ブリンという2人の青年は、スタンフォード大学の図書館の司書をやっていました。

僕はGoogleに行つて感動しました。今、漠さんがおっしゃったように、僕たちに提供されているのは書名と著者名しかないわけです。ところが、Googleは総索引だという。

Yahoo!は目次索引です、Yahoo!の本の目次では本のイメージは湧かないでしょう、だから、私たちは総索引をつくっています、ということです。それ

ぐらい掛かると思います。

角川▶共著の一人が亡くなると「もうろう著作物」になっちゃう。

夢枕▶それって何かルールをつくっておいたほうがいいですね。本の著作者が一人の場合、何人かの場合というように、アンソロジーの場合のルールを。

山崎▶本人が生前公開したいと思っていたことも、そのまま亡くなってしまえば、それを処理できなくなってしまう。

夢枕▶今、ある出版社で、ある傾向の本ばかりの全集をつくる作業に加わっているのですが、僕は好きな作品をいっだけなんですけれども、編集者は苦労しています。遺族の方から許可をもらうのがすごく大変らしい。遺族の方によっては、嫌だとおっしゃる方もかなりいて、この調整がむずかしい。

山崎▶それはデジタル化する場合も大きなハードルですね。小松左京先生の直筆原稿も、遺族の方が「図書館であ

れば」という条件でOKが出ました。「どう使われるか怖い」という心配もあるでしょう。

夢枕▶僕は「もう好きなようにどうぞ」というのが一番と思いますけどね。こいつを貶めてやろうと思って本を出すわけではないですから。みんな、その人の本が好きで、この人の本をみんなに読ませたいというのが一番根っこにあるでしょう。

山崎▶扱われ方の問題だと思います。しっかり扱ってもらえるのであれば出したはずなんです。今は、世の中に情報として流れる時に、どう扱われるかが非常にわからない。うまく利用されてしまうんじゃないかと、名前が汚されるのではないかと、そういう恐れだと思います。図書館で出すといえはある程度賛成していただけたということは、そういうことかと思えます。図書館は本を貸し出しているだけではなく、いろいろな展示やイベント、

セミナーをミックスして情報提供をしています。調べてくれるレファレンスサービスも、まだ言葉すら知らない方が多いんですけれども、行っています。ぜひ図書館員に聞いていただければと思います。

夢枕▶「こんな感じなので、これを書いてあるような本が欲しいんです」といおうとしても、僕のほうもあいまいな状態ですからどういう本が必要か、うまく説明できない。とにかく、棚そのものを眺めさせてもらうのがいいんですが。もうひとつ、ある事柄を書こうとして調べようとすると、どこまでわかっていないかがまずわからない。学者に聞けば「あ、それはわかってないんです」。

わかってることしか本に書いてないから、全部読んで「ああ、書いてない」。だからこれはわかってないことなんだなというのがわかって、うそがつけるという具合。(笑)

版文化や読書文化のよいところを両立させるような、図書館、出版社、著者の関係の在り方を改めてお話いただけますか。

角川▶僕がデジタル図書館構想というのを考えた時、アメリカにOverDrive, Inc.というモデルがありました。2年間で52回貸し出すという、一つのルールをつくって、その書店でレンタルをするというものなんです。これには僕もなるほどと思いました。そうすれば、リアルな本が2年間で52回読まれると一つの区切りがついて、それで次にもう1回再契約してもらおう。それによって作家も潤うと。料金が少なくとも作家に必ず還元されているということが拠り所です。

僕らも、作家になにがしかが払われるというシステムさえ確立していれば、出版社が一つの役割を果たしていると思える。そういう面で、図書館と作家と出版社というのは、大岡裁判で

僕は、あの源氏物語の本^①をやらせていただいて、ちよっと自分が得たなと思う。個人でやっている発想に限界がある。基本的に自分が考えることしか考えないわけで、それを自分の持っている技術で表現する。僕は自分から源氏物語は絶対書いていないと思うから。

角川▶無理にお願いして、書いてもらっちゃった。Twitterでツイートしたり、ニコニコ動画で生放送で書いてもらったり。3万人アクセスしてくれましたね。

夢枕▶おかげで僕は、何かちょっとまだ誰もやっていないようなことができるんじゃないかと思っています。電子書籍じゃないとできない何か。

僕には、残りの一生かかってでも書けないネタがいっぱいあるんです。それをネット上で提供して……とか。

今、いろいろなエンターテインメントで、一人で全部やっているのって作

① 秘帖・源氏物語 翁 OKINA

はないですけども、三方一両損なのか、三方一両得なのかわからないけれども、そういう関係を構築したい。そういうバランスの取れた制度を電子書籍というものが開拓するのではないかと期待を持っています。

山崎▶おっしゃるとおり、三者の役割が重要だと思います。それぞれがもとも持った役割をもう一度考えるべきです。電子書籍という新しいツールが生まれて、ネットワークも変化すると思います。

もちろん三方一両得でやらなければいけないと思います。特に電子書籍はこれから進む上の強力な武器になると思うので、みんなにメリットがある連携が必要だと思っています。(了)



司

書が必ずできなければならないこととは、図書館資料の選定・

除籍、分類・目録等の組織化、レファレンス、そして、図書館サービスの総合的な計画（プランニング）である。そして、知っていなければならないこととは、図書館法・著作権法等の関係法令、接遇や利用者対応のスキル、一般教養である。

もちろん、これ以外にもできなければならないことや、知らなければならぬことは、分担している仕事の内容や地域の状況によってたくさんある。しかし、司書が必ずできなければならないことというのは、「司書がやらなければならないことというの、誰がやるのだ？」という仕事である。また、知っていなければならないことは、これを知らなければ、トラブルが増えるというものである。これ以外にも、知っていた方がよいことやできた方がよいことはたくさんある。例えば、コンピュータ

の収集とも言う。国会図書館のように、基本的に、日本で出版されたものはすべて集めたいという「選定」もある。これとて、何が出されたのか把握しなければならぬから、簡単な事ではない。法律一本で「出版したら納本せよ」で済む話ではない。それに、国会図書館とて、外国の資料まですべて集めることはできない。ここでは、必ず、選定という判断が必要になる。

ここで注意が必要なのは、図書館資料の選定とは、一点一点の図書等について、これはいいのか悪いのかと言ったような検閲官まがいの作業をするということではないということである。

一点一点について判断する前に、図書館として選定方針や収集方針を定め、それに照らしてどうなのかという判断をするのが選定である。そして、この選定方針や収集方針は、司書が地域や利用者の状況を見て、個々の図書館に適したものを作成しなければならない

column 図書館司書のつぶやき

司書ができればならないこと・知らなければならぬことは？

い。だから、どこかの図書館がつくったものをコピーしてきたりして済む話ではないのである。司書といえども、本のことにだけ関心があればよいというものではなく、地域や利用者の状況にも注意を払わなければならない。ただ、これは、いわゆる「受けそうな本」をどんどん買えばよいということではない。図書館は書店でも貸本業でもないのです、たくさん貸出しが増えたからと言って、お金が儲かるわけでもないし、また、そもそもお金儲けを目的としているわけではない。

図書館が資料を選定するときの基本



に関する知識や、古文書等に関する知識である。ただ、これらは、実は、れっきとした別の専門家も存在するので、お互いに協力して仕事をすればどうにかなるという側面もある。もちろん、このためには、協調性とコミュニケーション能力（理解力や表現力や論理的思考能力等）が必要である。

当たり前の話だが、司書以外に専門家がいない、そういう範疇のことは、司書が知っていて、できなければならない。さて、ところが、これがどうも怪しい。司書の評価を下げてしまうのは、上に述べたようなことがあやふやな人が案外、少なくないからである。今回は、とくに選定についてと分類・目録等の組織化について触れたい。

1 図書館資料の選定

まず、図書館資料の選定である。もうひとつの言い方として、図書館資料

は、その資料が、その地域の利用者役に立つかという視点である。利用者の役に立つという視点に立てば、多くの資料が必要になるから、必ずしも一点一点の資料の貸出しが多くなる（いわゆる回転率が高くなる）ということにはならない。

これはどういふことかというところ、どのような分野でも、よく引き合いに出される本というのはあるが、いわゆるバイブルほどの本というのはそんなにないということである。だから、それぞれの分野について、いろいろな著者がいろいろな視点から書いた本が必要ということになる。また、バイブル並みの本があったとしたら、それは、1冊だけでなく複本を買う必要もあるかもしれない。複本を買えば、当然、1冊当たりの回転率というのは落ちるが、図書館が目指しているのは回転率とかそういうものではない（もっとも、こういう指標も無視してはいけない）。

だけど、どうして、そんなことが司書がわかるのか、それぞれの分野の専門家でもないのにという声もある。その通りである。だから、司書は、それぞれの分野の専門家の声も聴かなければならない。ただ、司書がそういう個々の専門家と違う点は、個々の専門家の視点や立場を越えて評価できる立場にあるということである。

だから、司書が選定をするというのは、いろいろな人の意見や見解を集めて、自分がある図書館でどうしようかと考えることに他ならない。この「いろいろな人の意見や見解」を集めるというのは、直接、利用者や住民や地元の有識者に尋ねてもいいし、書評や出版社の案内を通じてでもよい。出版社の案内など、ただの宣伝ではないかと思う向きもあるが、出版社の存在意義は、これは世に出す価値があるのかどうかという判断をして情報を発信するということにある。場合によっては、

の公費で買ったものを、場合によっては廃棄するわけだから、むしろ、もっと高度な判断である。最終的な判断は館長の判断になるが、候補をピックアップするのは司書の仕事となる。これも、一定の方針や規準を定める必要がある。

一律に何年より以前に出版された本は除籍という決め方は乱暴すぎる。書庫に入れるルールとして、ある年より前のは入れるというのは、ひとつの方法である。図書館の性格によっても大幅に異なってくる。都道府県立図書館は、複本や他の図書館等への移管以外は原則、除籍できないと考えた方がよいだろう。なぜなら、県内の市町村立図書館へ本を提供する「最後の砦」だからである（国会図書館は資料保存という大事な機能があるので、国会図書館にこの機能まで負わすのは限界とリスクがある）。市町村立図書館は、これも規模等によって大幅に異なる。大

著者に原稿について意見だつて言うわけである。もちろん、ただ売ればいいという視点でのみつくられている本もあるが、そのような出版社は出版社自体の評価がそういう評価になってしまふ。出版社は事業だから、売れなければ困るが、どうでもいいから売ればいいというのではなく、やはり、この内容は価値があるから売りたいと基本的に思っているのだ。ということである、司書には、出版社を評価する目も求められる。出版社や著者について、なるべく多く知っているということが



きな市の図書館だつたら、ほぼ都道府県立図書館に準じた方針や規準によるべき場合もある。ただ、一般的な市町村では、地域資料を除いては、むしろ、積極的に除籍も行わないと、書架の管理が滞る。ただし、分野によって、資料のライフサイクルが違うことを認識しなければならない。医学関係は古い知識のものは置かない、法令の改正に注意する、語学等では国によっては正書法が変わっていることがある、などあるが、見落しがちなのが、科学技術系でも、ある意味、「枯れた技術」（一

必要である。個々の出版社についての事は、司書課程等で教えられる事ではないので、自分で努力して、出版社のホームページを見たり、出版社の広報誌を見たり、直接、その出版社の出している本や雑誌をよく見て考えたりするということを日頃から行うということである。なお、社史を出している出版社は、それも見ておくとうい。『出版社大全』（塩澤実信著 論創社 2003）という便利な本もある。それから、専門の雑誌や新聞を出している出版社は、当然、その分野に強いので、図書を知る前に、雑誌や新聞を知ることが重要である。

2 図書館資料の除籍

図書館資料の除籍というのは、ある意味、選定よりずっと難しい。選定も公費を使うわけだから、いい加減にやってよいわけではないが、除籍は、そ

定確立された分野を扱ったものは古いものでも必要だつたり、歴史関係のもので、新しい発見等により大幅に史実が書き変わっていて、新しい資料が必要であつたりすることである。

つまり、除籍というのは、単に、書架がいっぱいになってしまったから、それを取り去るという意味だけではなく、新しい内容の本に更新していくという意味が大きく、選定と連動するものである。この認識を欠いていてはいけない。

3 分類・目録

かつて、図書館の技術の中で、分類・目録が過大視され、利用者へのサービスそっちのけで、その方面の職人的スキルばかりが評価された時代もないわけではなかった。しかし、今や、むしろ、その逆に、この技術が過小評価されていると言つてよい。



その理由としては、MARCデータの普及があげられる。MARCとはMachine Readable Catalogingの略で、ひらたく言えば、コンピュータで処理できる形で、目録データを流通させるといことである。公共図書館の場合は、たいいてい、このMARCデータを購入して自館の目録に使用している。そのため、まっさらな状態から目録を作成しなければならぬということが少なくなり、もともと簡単な場合は、図書に印刷されているISBN（国際標準図書番号）をスキャンすれば、当該のMARC

データが呼び出され、ほとんどそのまま使えるということになる。こういう業務が増えたため、そんなに詳細な目録の知識は不要との誤った認識が一部に広まった。

しかし、これは大きな間違いである。そもそも、目録の知識をしっかりと持っていないと、目録データベースをちゃんと検索できない。ちゃんと検索できないことを一方的に、コンピュータのアプリケーションのせいに行っている人がいるが、実は、目録についての知識不足が原因である。もっとも、一般利用者にとっても、目録の知識を求めるのは無理があるので、利用者向けの目録には種々の工夫が必要である。そこで、どういう工夫をするのかというのは、司書が提示していかねばならないのだが、その当の司書に目録の知識が不足していたら、こんなことは覚束ない。コンピュータで資料を検索することが常識的になっている現代、目録という

のは、第一線の利用者へ向けてのサービスなのである。

それから、どんなにMARCデータが普及しても、相変わらず、MARCデータの無い本がある。とくに、地域資料、行政資料に顕著である。これらは、どこかが最初にデータをつくらなければならない。そして、そのデータをつくる人は、やはり、本来、司書である。MARCデータの無い本は収集しないという方針の公共図書館があったとしたら、それは、どこがおかしいのではないかと思う。古文書等は博物館や文書館・資料館があればそこが整理するだろう。しかし、地域の出版物は、地域の公共図書館が必ず集めるべきである。これは、性格上、自費出版も多く、MARCデータが存在しない場合が多い。こういうものの収集を放棄したら、地方自治体が公共図書館を設置している意味がなくなってしまう。

分類については、日本の公共図書館

はおおかた、日本十進分類法（NDC：Nippon Decimal Classification）を採用しているが、各図書館の事情に合わせて若干の修正を施しているのが、むしろ、普通なので、目録ほど、司書の知識が減衰するということはなかった。しかし、最近では、これまで、業者に任せるケースも多くなっている。これは、図書館の規模が大きくなってやむを得ずという場合もある。

日本十進分類法は数字で表現されているので、数字の小さいものから順に並べることができ、それが一般の人にとつてもわかりやすいというメリットがある。しかし、各種のコーナーやゾーン分けによって、これをどうしても崩さざるを得ないのが、図書館の実態である。また、文庫本や大型本等は収納効率の観点から別置になる場合も多い。

実際には、図書館利用者の方も、ちょっとした学習を行わないと、図書

館の資料の配置の仕組みはわからないだろう。利用者向けの講座等も必要である。そこで講師をするのは、当然、図書館の司書となるから、この司書自体が、分類をきちんと理解していなければならぬのは言うまでもない。

このように、コンピュータの導入や業務委託等によってルーチンの業務で関わるものが少なくなったからと言って、司書が詳しい知識は知らなくてよいということにはならないのである。

それから、本来は、ウェブで図書館の蔵書を検索するときには、分類をたぐって検索していく方法はむしろ向いていると言える。とくに、文字を入力するのが得意でない人にとっては、クリックだけしていけば、ある程度、検索ができることになる。この方面はもっと研究価値があるはずである。

さらに、見落とされがちなことだが、著しく予算がない図書室なみの図書館では、パッケージ・システムもMARC

データも購入されていないことがある。このような状況の場合に、司書は「ノートパソコンにエクセルでいいから最低限の整理をしてくれ」と言われることがあるが、整理をする司書側に分類・目録の知識がなければ、いい加減な整理しかできないだろう。司書の知識というのは、一から作り上げていかなければならない状態でも適応できるものでなければならないのである。



column 図書館司書のつぶやき

司書ができなければならないこと・知らなければならないこととは？



津波で冠水した気仙沼市街地の現状



①「リアス・アーク美術館」気仙沼市の中心部から南西2.5km、気仙沼湾を見下ろす丘陵地帯の一角にある美術館です



②「常設展示」手前にあるのは自転車と洗濯機

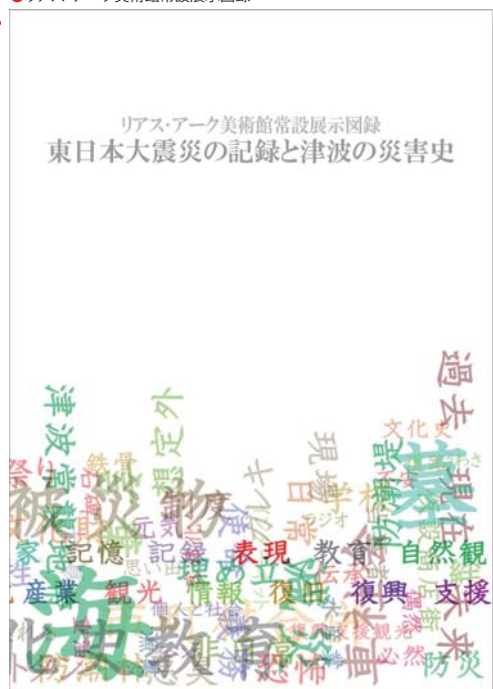


③「常設展示」手前の塊はフレームだけになった自動車

無料公開概略

- お申し込みは、図書館単位を予定しています。
- 1 図書館につき、1 ID/1 Password (閲覧可能限定: 公開日～2014年12月31日まで) を発行いたします。
- 図書館利用者に発行されたID/Passwordを公開する事が可能です。
- 閲覧の為に、タブレット端末又はスマートフォンが必要です。
- 閲覧用アプリケーション(無料)のダウンロードが必要です。

③リアス・アーク美術館常設展示図録



④「東日本大震災の記録と津波の災害史 製作委員会(仮称)」について
リアス・アーク美術館の協力の元、NPO法人知的資源イニシアティブ(IRI)、電子書籍図書館推進協議会(ELPC)、株式会社寿限無で組織する図録の電子書籍化の為に発足した委員会。

⑤電子書籍図書館推進協議会(ELPC)のホームページ
<http://www.keiyou.jp/elpc/>

リアス・アーク美術館①では、現在「東日本大震災の記録と津波の災害史」と題した常設展示②が行われています。3・11直後から同館の学芸員自らがカメラを手にし、震災の惨状を撮影した写真や被災物を、被災者感情の

キャプションに託し展示されている展示物は、見たもの誰にも息を飲ませ、震災時の現場に引きずり込みます。さらに、過去の歴史やそこから学べべき事を、被災地ならではの観点で防

災のアドバイス・提言等を行っている。点か、災害の記録を記憶に留める事の真の意味の重要性を訴えかけているようです。これら展示を世代や地域を越えたより多くの方が見て、読んで、自身の日々に照らし合わせて、被災者や被災者となり得る誰にも考えるべき課題を共有させ、未来の為に地域復興の一役を担いたいとの考えから、3・11の3年目の2014年3月リアス・アーク美術館が展示会図録⑤を制作されました。

『東日本大震災の記録と津波の災害史』へ東日本大震災の記録と津波の災害史 製作委員会(仮称)発行の電子書籍を公共図書館・大学図書館で無償公開いたします。

震災を語り継ぎ、大切な人が暮らす未来の為に…。

リアス・アーク美術館常設展示図録

東日本大震災の記録と津波の災害史

現場写真

(テキスト執筆：山内宏泰)

リアス・アーク美術館常設展示図録 東日本大震災の記録と津波の災害史
余りにも重いコメントと画像の数々で選ぶことは難しいのですが、図録の一部を紹介します。



2011年3月12日、気仙沼市松崎片浜の状況。前日の言が違のよう、朝から晴天となった。対岸とその付近の海上からは、もうとうと煙が上がり、津の奥の方はかすんでしまっている。まだ何がどうなっているのか全く把握できていないが、明らかに海岸が壊滅してしまったということ。『ためです。なんにもありません。壊滅です。』早期、現場を確認した調査員が険しい表情でそう語った。(写真撮影：塚本卓)



2011年3月23日、気仙沼市弁天町の状況。調査員宅跡斜め向かいに立つ水産会社の冷凍施設。記録調査中に足を止め、自宅の痕跡を探しつつ、まるでインスタントラーメンをたきつけたような状態で絡みつく無数の鉄骨、家具、建材等の異様さに立ちどく。隙間なく、水流をそのまますかのよう、に重なり合うこの状況を、人力で再現することは不可能と感じた。津波の力は人の想像をはるかに超える。(写真撮影：岡野志龍)

被災物

(写真撮影：テキスト執筆：山内宏泰)



「自転車 2011.3.23 気仙沼市山町1丁目」
ナンバプレートで分かったんだけど、おらいの軽トラ、シャシーだけで、まるで下駄みたいな形になってた。まず、すごいもんだね。運転席のあたりなんか、何にも残ってないから呆れちゃった。
車って思ってたよりも、ずつモロイのね、って言うか、やはり津波の破壊力ってすごいんだね。

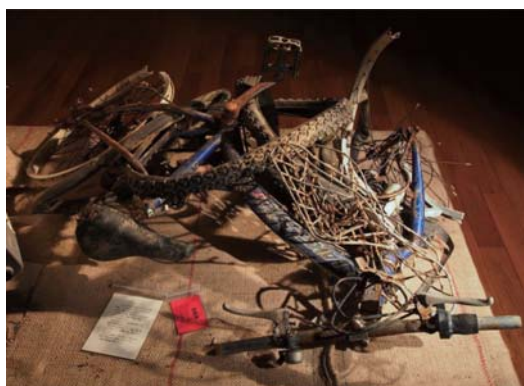


「洗濯機 2011.11.22 気仙沼市本吉町三島」
我が家はバラバラになって、流されて、田んぼにまき散らされてしまったんです…秋口に、ぬかるみが、ようやく歩けるくらいになって、それで、気になってた洗濯機を見に行ってみたんです。やっぱりうちのでした…洗濯槽の中に泥が積もってました。
洗濯機って、脱衣所とか、洗面所にあるでしょ。あそこって、身もそうだけど、心も清めるっていうか…お風呂とかね。安心できる場所。いろいろきれいにするそういう場所と、洗濯機ってセットなんだよね。
なのに泥が入って…見なきゃよかったなあって…悲しくなった。



2011年3月28日、気仙沼市仲町の状況。まるで舞台装置のように壁がなく、内部が丸見えになった家屋。隣接の白い建物に比較すると壊れ方がひどい。結果を左右するのは道路や空き地、駐車場などとの位置関係である。陸に上がった津波は道路や駐車場などを水路代わりに浸水する。当然流速は速く、漂流物も多くなる。ゆえに交差点の角にある家屋などは被害が拡大する。(写真撮影：岡野志龍)

2011年3月14日、気仙沼市岩月千岩田の状況。海岸沿いを走るJR気仙沼線。乗客乗員は避難して無事だったが、車両はその軌道ごと津波に流された。1957年（昭和32年）から1977年（昭和52年）にかけて整備された気仙沼線。1960年にはチリ地震津波も襲来していた。明治、昭和の三陸大津波被害を顧みれば、もっと山側に軌道を敷くべきだと気付いたはずだが。(写真撮影：塚本卓)



「自転車 2011.12.1 気仙沼市梶ヶ浦」
おじいちゃんに買ってもらった自転車。マウンテンバイク。4年生になった時に買ってもらった。それまではね、お兄ちゃんのおさがりだったから、初めて新品で買ってもらったやつだったよ。うんとねえ…12段変速だった。坂道も登れたよ。
おじいちゃんねえ…船、海に出すって言って、地震の後、港に行った…ん…帰ってきてない。まだ分らない。お父さんが探しに行ってる。また自転車に乗りたい。

震災を語り継ぎ、
大切な人が暮らす
未来の為に…。

「時計 2011.11.18 気仙沼市弁天町2丁目」
気仙沼魚市場の屋根の下にある時計。3時33分で止まっていた。結構な高さだ。5mくらいあるんでない、中央公館のホールの時計も同じ時間で止まっていた。気仙沼では、最大波が上ったのはその時間なんだね。南三陸町は、もう少し早かったようだね。3時27分頃とかだね。
俺はね、2時46分でなくて、3時33分に黙とつすんだよね。気仙沼ではその時間にくっついた人が一番多いはずだからね。





丸善出版 学鑑

<http://www.maruzen.co.jp/corp/gakuto/>

- ①季刊 ②3・6・9・12月の毎月5日発行 ③大学、官庁、図書館、マスコミ、文化人
- ④「学鑑」は明治30年3月創刊以来、関東大震災、太平洋戦争の一時期を除き続いているPR誌の嚆矢です。一企業のPR誌の枠をこえてわが国の学界・言論界のなかで育ってきました。現在は毎月よみきりの特集を主体とした構成で3・6・9・12月の年4回発行しています。学術エッセイにとどまらず各界の方々から寄稿していただいています。
- ⑤『いばら路を知りてささげし』井出孫六：著 岩波書店
『下町ロケット』池井戸潤：著 小学館
『釜ヶ崎語彙1972-1973』寺島珠雄：編著 新宿書房
『新編 山之口猷全集第1巻 詩篇』山之口猷：著 思潮社
『孢子文学名作選』田中美穂：編 港の人



ジュンク堂 書標

<http://www.junkudo.co.jp/>

- ①毎月1回 ②5日 ③店頭配布
- ④ジュンク堂書店は、マニアックな専門書も網羅する図書館のような書店です。PR誌「書標」は、著者が執筆時のエピソードなど語る「著書を語る」、各ジャンル新刊の中から店員が選ぶおすすめ本、店頭で好評だったフェア紹介、読者からの投稿、本屋うらばなし、などなど薄い中にも盛りだくさんな内容。最新号はサイトのトップページでバナーをクリックすると全文を読むことができます。
- ⑤『ペコロスの母に会いに行く』岡野雄一：著 西日本新聞社
62歳の漫画家が描く、認知症の母との日々。笑顔で読みながら、泣けてくる本です。



東京大学出版会 UP

<https://www.utp.or.jp/topics/up/>

- ①月刊 ②毎月5日発行 ③有料購読者、東京大学スタッフ、公共・大学図書館など
- ④1972年11月に創刊した『UP』(ゆう・ぴい)誌は、学問の最前線やその周辺のトピックス、読書論や書物をめぐる小論・エッセイ、歳時記風のコラム、毎月の新刊・重版案内を掲載しています。2014年6月号で、通巻500号を迎えます。年間購読料1,000円(送料・税込)。



東京外国語大学出版会 pieria(ピアリア)

<http://www.tufs.ac.jp/blog/tufspub/>

- ①年1回 ②4月1日
- ④『pieria (ピアリア)』は、東京外国語大学出版会と附属図書館の共同企画で発行している読書冊子です。今年発行の通巻第6号は「未来への想像力のために」と題し、特集「古典の森へようこそ」、「文字から広がる世界」のほか、「フィールドノート」などのエッセイ、本学の教員、在学生や、海外からの留学生によるおすすめ本の紹介など、もりだくさんの内容で、読書の世界が広がります。
- ⑤1冊だけの紹介は難しいです。ぜひ『pieria』をご覧ください。

え! こんなにあるの!? 知らなかった...

ほんの泉

新聞・出版社のPR冊子

このコーナーでは、「出版社PR誌」を紹介し、書店に置かれている場合もありますが、雑多な情報に埋もれて気づかないことも多く、地方書店が減少している昨今、なかなか読者に届いていないのが現状です。本好きな読者はもちろんのこと、本と読者を繋ぐ役目を担う図書館で働く方々には、その存在を知り、ぜひ手に取って頂きたい「ほん」達です。「月刊ほん」は、出版社発信のこれら「ほん」達を、知識の水ととらえ、このコーナーが「その源=湧き出す泉」になればいいと考えています。

- ①発行サイクル ②発行日 ③主な配布先 ④紹介文 ⑤編集部おすすめの1冊

角川書店

本の旅人

<http://www.kadokawa.co.jp/mag/tabibito/index.html>


- ①毎月1回 ②27日刊行 ③主要書店店頭
- ④角川書店が毎月発行する、本好き読書人のための文芸PR雑誌。特集対談、連載エッセイ、連載小説と内容がかなり濃く、コミックにノンフィクションもある。連載小説は、時代小説から恋愛小説まで、うれしくなるほどの豪華執筆陣。カラーページもたっぷり、読みごたえは充分すぎるほど。主要書店に置いてあるが品切れが早いので、必ず手に入れたい場合は本屋さんに予約購読を。近刊は電子書籍でダウンロードも可能。
- ⑤本の旅人の好評連載をまとめた『スナックさ いばら おんなのけものみち』シリーズ。6月末刊行の「生きてりゃいいじゃん、笑っつけ篇」で全5巻。女の恋愛・結婚・出産・離婚・介護・看取りまで、人生の山あり谷ありに寄り添う、笑いと涙満載の内容です。おんな、と銘打っていますが、「女心がよく分かってで参考になります!」と男性陣からも好評です。


<http://www.kadokawa.co.jp/saibara/>


ダイヤモンド社 経(Kei)

<http://www.diamond.co.jp/magazine/kei/>

- ①毎月 ③書店
- ④経済・ビジネスに特化し、著名な経済学者が日本経済をめぐって刺激的な論文を執筆。科学者や作家、経済学者、歴史学者など、さまざまな分野の著名人のエッセイや旅行記まで掲載。連載も多いことから、定期購読がぜひお勧め。全国主要書店で10日頃より無料頒布。頒布部数限定、品切れ続出でほしい方はお早めに。全国主要図書館において閲覧可能になる予定。
- ⑤『嫌われる勇氣 自己啓発の源流「アドラー」の教え』岸見一郎／古賀史健：著



ダイヤモンド社書籍オンライン
<http://diamond.jp/list/books>



投稿・投書を歓迎します

「月刊ほん」では、図書館・本に関する投稿・投書を受け付けております。字数は800～2000字。受け付けは電子メール(原稿としてテキスト変換できる書類の添付)のみです。概要、氏名、略歴、住所、電話番号、メールアドレスを添えてください。採用の場合は事務局より電子メールでご連絡します。受け付けのアドレスは以下のとおり。

電子書籍図書館推進協議会 事務局
elpc@fms.co.jp

http://www.keiyon.jp/elpc/

一本のまわりに集まろうー

月刊
Online Magazine
ほん

published by ELP
創刊号
2014年6月号

2014年6月発行
発行人 山崎博樹
編集人 黒田久美子
発行所 電子書籍図書館推進協議会 事務局
住 所 〒101-0051
東京都千代田区神田神保町2-30
神保町ハウスR04
TEL: 03-3221-0597

創刊準備号の発行以降、創刊号発行を夢見て動いてまいりました。創刊号の目玉として出版界と著者、図書館関係者による鼎談が企画されたのは1月も下旬に入ってから。周りからは、「面白い!」という声が上がってはいたものの、副音声で聞こえてくるのは「設立間もない当協議会の状況では、無茶でしょ」という声でした。そんな中、「角川会長×夢枕獏様×当協議会山崎代表」の鼎談は実現し、創刊号にふさわしいトピックス満載の

編集後記

創刊準備号の発行以降、創刊号発行を夢見て動いてまいりました。

鼎談になったように思います。ひとえに、鼎談ご参加者のご理解ご協力は当然のことながら、ご関係者各位のご尽力によるものです。この場を借りてお礼申し上げます。本当にありがとうございます。

「3号まで続けられるかどうか、その雑誌の定期刊行を占う」とある出版社の方から聞いたことがあります。「月刊ほん」の頭2文字が有効になる時を目指して、2号目の企画を練り始めたいと思います。ご意見お待ちしております。

電子書籍図書館推進協議会 事務局



図書館関連企業の広告主も募集中!

《電子書籍図書館推進協議会 事務局》までお問い合わせください。



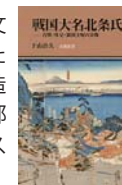
有隣堂

有鄰

<http://www.yurindo.co.jp/yurin/intro>

- ①隔月刊(奇数月)1・3・5・7・9・11月 ②奇数月10日、ただし1月は1日発行日
③自社(有隣堂)各店舗店頭・事務所、関係先、定期購読者
④1967年12月創刊。神奈川の歴史・文化にちなんだテーマをはじめ、文学・芸術・時事問題から話題の出版企画など幅広い分野を取り上げた執筆記事のほか、神奈川ゆかりの執筆者によるコラム「海辺の創造力」。著者へのインタビューをもとに紹介する「人と作品」。書評欄「有鄰らいぶらりい」。新刊情報を伝える「新刊書の手びき」。テーマ別にリストにした「類書紹介」を掲載。小社出版物に関する企画も取り上げる。

- ⑤『戦国大名北条氏—合戦・外交・領国支配の実像』下山治久:著 有隣新書73
日本中世史が専門の下山治久氏が、前作『横浜の武士たち』(有隣新書70)に続き、書き下ろした北条氏五代の興亡の歴史。
『辞書になった男—ケンボー先生と山田先生』佐々木健一:著 文藝春秋
『三省堂国語辞典』と『新明解国語辞典』を編纂した(故)見坊豪紀(ケンボー先生)と(故)山田忠雄(山田先生)を追ったノンフィクション。

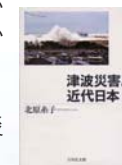


吉川弘文館

本郷

<http://www.yoshikawa-k.co.jp/news/nc354.html>

- ①隔月刊 ②奇数月1日 ③書店、図書館、定期購読者
④『本郷』という誌名には小社所縁の地名だけでなく、「本の郷」という思いも込められています。旬のテーマの特集をはじめ、対談・エッセイから歴史学の最新レポートまで、豪華執筆陣による硬軟バラエティに富んだ質の高い内容が自慢です。出版情報のお知らせにとどまることなく、本の持つ豊かな世界と知の広がりを読者にお伝えしていきたいと考えています。
⑤『津波災害と近代日本』北原糸子:著 5月下旬刊
明治と昭和の三陸津波被害の実態から“想定外”では片付けられない災害の現実を学び、困難を克服するための道筋を探る、いま注目の一冊。



幻冬舎

PONTOON(ボンツーン)

<http://www.gentosha.co.jp/pontoon/>

- ①月刊 ②毎月1日 ③全国の大手書店 ④文芸出版社幻冬舎のPR小説誌です。
⑤『ドミナ』うかみ綾乃:著 6月12日発売
愛されたい、認められたい、満たされたい。
狂おしい葛藤の末に滲み出す、女たちの狂気——。
生きることは、なぜこんなにも愚かしく美しいのか。
話題の女性作家が描く、嘗てないほど愛おしい人間小説!
昨今ないド迫力と、圧倒的なリーダビリティのエンタメ長篇です。

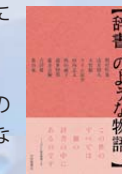


大修館書店

辞書のほん

<http://www.taishukan.co.jp/item/jishonohon/mokuji.html>

- ①季刊(年4回) ②1・4・7・10月(各月初から随時配布) ③全国主要書店
④辞書を、単なる勉強の道具としてだけでなく、日々の暮らしを豊かにするための「知」のツールとして訴求していくのが本誌の狙いです。
⑤『辞書、のような物語。』
辞書を題材とした掌篇小説をまとめたアンソロジー。各ジャンルの一線で活躍する著者たちの紡ぐ物語から、日ごろ意識することのなかった“辞書”という存在がリアルに立ち上がってきます。



本に関わる人たちが 新たな関係を築き、 繋がることを目指して。

出版社(者)はたった一人の読者であっても、その読者が欲するならば本を届けたいと思うはずであり、図書館員は、その本と読者を繋ぐ重要な媒介とならなければいけません。その為には、出版社(者)と図書館の新しい関係を築きながら、読者と本を繋ぐ新しい場が求められていると考え、「月刊ほん—本のまわりに集まろう—」を発刊する事といたしました。

「月刊ほん」を通して、本を中心として働く図書館員と本を提供している出版社(者)との相互理解が深まり、その事で図書館が従来の枠を超えて、読書推進のとびらを開くことにも繋がるのではないかと考えています。将来は「本を読む人」一人ひとりにも働きかけ、読者と本との出会いの場も提供していければと考えています。

電子書籍図書館推進協議会
ELPC (Ebook Library Promotion Council)

電子書籍図書館推進協議会(ELPC)は、図書館と出版社(者)の新たな関係を築くため、2012年9月に設立された会です。